

【以善会レポート】特別編①

『松ヶ丘山崎家略譜稿本』翻刻に当たって

以善会

はじめに

郷土史家の袴田鷹邨が著した『松ヶ丘山崎家略譜稿本』は、松ヶ岡山崎家の初代才兵衛から九代目の淳一郎までの事績などをまとめた書物です。昭和三十一年（一九五六年）に山崎家が東京に移り同家の史資料の多くが散逸する前に編纂され、他では見ることのできない多くの史料が掲載されている、たいへん貴重なものです。

しかし、その存在を知る人は非常に限られており、通読した人となるとさらに限られることと思われます。

松ヶ岡山崎家の歴史を勉強している以善会では、鷹邨のご子孫から同書をお借りして読み進めてきました。袴田家蔵の同書は、二十五字×二十行の原稿用紙など約二百枚に手書きされていて、崩し字で一マスに二文字書かれている個所が多く、句読点もあったりなかったりで、必ずしも読みやすいものではありません。

そこで、掛川市の『松ヶ岡（旧山崎家住宅）公式WEB』に同書の翻刻を掲載することにしました。十数回に分けて載せることとなりますが、その前に同書について紹介したいと思います。

一、『松ヶ丘山崎家略譜稿本』とは

『松ヶ丘山崎家略譜稿本』の跋（あとがき）によると、袴田鷹邨は昭和十七年（一九四二）十月、山崎家（当時の当主は十代目の健太郎）の依頼を受け、同年十二月から翌年十二月まで、松ヶ岡の奥間に席を設けて書庫にあるさまざまな史資料にあたるとともに、各地の山崎姓の家を訪ねるなどして調査を進めました。

いちおうの完成をみて山崎家に提出したのは、跋の日付である昭和十九年八月とみていいでしょう。

『松ヶ岡山崎家略譜稿本』の中表紙には、題名のほか「紀元二

千六百年記念編纂」「袴田鷹邨未定稿」と書かれています。紀元二千六百年は昭和十五年で、神武天皇即位から二千六百年に当たるとされ、全国各地で記念行事が催されました。山崎家もこの機運に乗って先祖を顕彰する書を企画したのだと思われます。

おそらくは、当初は自家で編纂しようとしたのが、なかなかうまくいかなかったため、郷土史家として活躍していた鷹邨に依頼することにしたのでしょう。

また、「袴田鷹邨未定稿」とあるのは、鷹邨が跋に「排列当を得るも一時未定稿として一本を松ヶ丘に提出し下書を家に蔵す。後日補正すべきもの也」と記しているように、記述が錯綜している個所があり、鷹邨自身が満足できる出来栄ではなかったためです。

実際、松ヶ岡に提出した後も鷹邨は補訂作業を続けていたようです。当初の原稿は「松本紙舗活版部印行」の原稿用紙に書かれていたのですが、マス目のない紙に書かれている個所もあり、これらの個所が提出後の補訂だと推測されます。

今回翻刻するのは袴田家蔵の下書ですから、鷹邨の補訂後のものということになります。

二、長所と短所

前述の通り『略譜稿本』は、松ヶ岡の書庫で膨大な一次史料に当たってまとめられたものです。松ヶ岡の史資料は多くが散逸してしまっただと考えられますから、同書に引用された史料は貴重なものになります。

一例を挙げれば、「以善会レポート」第三弾で取り上げた、山崎晨園から松崎慊堂に宛てた手紙は松ヶ岡に残っておらず、山崎家から掛川市に寄贈された史資料の中にもなく、『略譜稿本』でしか読むことができせん。

一方、山崎家の依頼によって書かれたものですから、同家にとって不都合、不名誉な出来事には同書はまったく触れていません。例

えば、大正七年（一九一八）の米騒動では、大事には至らなかったものの松ヶ岡も襲撃を受けて寄付を約束するのですが、『略譜稿本』では襲撃されたことには触れずに寄付したことだけを記しています。

また、山崎家の顕彰という観点から触れる必要がないと判断したのかもしれませんが、同書は経営のことにほとんど触れていません。

松ヶ岡山崎家は、油商として財を成し、その後、掛川藩をはじめとする諸藩や旗本らに金を貸す金融業者としての側面を強めていき、居宅を西町から松ヶ岡に移した頃には油商を辞めていたようです。また、農園の代に農地開発に乗り出し、明治時代には静岡県下有数の大地主になっています。

しかし、これらの具体像は、大名貸しと農園の農地開発を除いては、同書から知ることではできません。山崎家の顕彰を目的とする書を一年八ヶ月という短い期間で仕上げたため、経営の側面を省略することはやむをえなかったのかもしれませんが。

これらいくつかの欠点はあっても、今後さまざまな史資料を検討する際に、歴代当主や家族の没年、主要な事績など基本的な事柄が記されている『略譜稿本』が基点となるはずです。

三、著者の袴田鷹邨

袴田鷹邨は本名を銀蔵といい、明治九年（一八七六）八月二十日、現在の掛川市長谷に生まれました。西南郷村収入役などを経て明治四十二年十一月から昭和十一年（一九三六）まで村長を勤め、そのかたわら郷土史研究にも取り組みました。

晩年は掛川市文化財専門審議会委員、掛川市誌編纂委員会顧問などを勤め、昭和四十二年十一月十四日に九十一歳で亡くなっています。

以上の略歴は、鷹邨自筆（昭和四十二年の記事は異筆）の『回顧録』によるものです。著書には『松ヶ丘山崎家略譜稿本』のほ

か、『西南郷村小史』『掛川城略年譜未定稿』『掛川町内寺院仏堂金石文写明細帳』『偕楽園始末記』など多数あります。

昭和四十一年八月二十一日付の『郷土新聞』には「貴重な資料保存に努力―半世紀をこの道に尽した袴田翁」という記事で、郷土史家としての鷹邨の業績が紹介されています。

そこには「珍しい資料があれば、すぐに飛んで行って、借りうけて書写する。一字一句まちがいをなく写し取るために、夜家人が寝静まってからとりかかり、徹夜もいとわず、疲れも覚えずに書き写し、これを毛筆で浄書し」とその熱心が記されています。

そして、『太田家年譜』の写本をつくるまでの苦勞を紹介し、「一つの写本を得るために二十年近くも努力を傾けてきた翁の熱情が、消え去ろうとする貴重な郷土史の多くを完璧に近かい写本によって保存されてきたわけである」と、その業績を讃えています。

おわりに

『松ヶ丘山崎家略譜稿本』は上・下・附録の三巻からなり、今回はその上・下巻を翻刻します。

ただし、上巻「山崎家の種族并出自」は全国の山崎氏を列挙していて松ヶ岡山崎家とは関係のない記述が大半のため省略しました。このほか下巻の「雑載」「諸物価」などの項でも省略した個所があります。いづれも他の書籍等で見ることでできたり、松ヶ岡山崎家とは直接の関係はないと判断した個所です。

末筆になりましたが、『松ヶ丘山崎家略譜稿本』をお貸しください、また、翻刻を許可していただいた袴田征一様には、会員一同深く感謝いたしております。

(了)